

『山家集』所載西行歌一首存疑（下）

—『治承三十六人歌合』所収平経盛詠との関連において—

犬井 善壽

○

西行の『山家集』に「恋」の詞書で載る、

六五九 なにゆへかけふまでものをおもはまし命にかへてあふよなりせば

は、『別本山家集』に「恋の歌よみけるに」の詞書で載り、『西行上人集』李花亭文庫本の「追加」に「東国修行のとき、ある山寺にしばらく侍て」の詞書で初句「何ゆへに」の形で載る。また、『万代集』には「題しらず」として初句「何故か」の形で、『続古今集』にも「恋の歌とて」の詞書で初句「何故に」の形で、共に「西行法師」の歌として収められている。

ところが、谷山茂氏の御指摘のとおり、この歌は、『治承三十六人歌合』には平経盛詠とある。尤も、初句に「何せんに」という異文はあるが。

『治承三十六人歌合』は、西行・経盛兩人の在世中に成ったもので、文学史上の価値も高い。その書に経盛詠とある歌が『山家集』等で西行歌とされるといふ事実は、看過できない。

問題の歌は西行代作の可能性がある、という推測もされたが、『治承三十六人歌合』の内部微証から、その可能性はまず無いと言える。

この書の所載歌の詠者を他文献で検討すると、この書には詠者の誤りの無いことが判る。状況証拠に依るとはいえ、この書は詠者認定の爲の証拠価値が高いと言える。従って、問題の歌は、外部徴証からは経盛詠と認定してよい。

用語・語法・素材・主題等の点で問題の歌と共通するところのある歌が、経盛歌には多い。内部徴証からも、問題の歌は経盛詠に非ずとは証明できない。経盛が詠む可能性はある、とは言える。

要するに『山家集』所載の問題の歌は、外部徴証に依っても外部徴証に依っても、経盛詠と認められる。以上が、本稿の「上」のあらましである。

〈七〉

「何故か」の歌は、外部徴証から経盛詠と見てよく、内部徴証からも経盛詠とすることへの積極的な反証は無い。従って、これを西行歌とする『山家集』『別本山家集』や『西行上人集』の「追加」には別人詠が混入しており、西行歌として収める『万代集』『続古今集』は詠者誤伝のままを撰んだ、ということになる。

この推理は、論理は通っている。が、問題はあつた。

これらの集には他人詠歌の混入や詠者の誤りが他に全く無い、というのなら、話は違ってくる。問題の歌のみが例外となる理由の説明がつかない限り、これらの集に詠者の誤りが無いという事実が証拠になって、逆に、『治承三十六人歌合』が問題の歌を経盛詠とすることの方が誤りである、ということになりかねない。

かような懸念が残る為、本節では、『山家集』等には他にも存疑歌や誤伝歌があるということを示し、問題の歌のみが誤伝歌なのではないという、いま一つの状況証拠を提示してみたい。

最初に、『山家集』の存疑歌の例を示す。

海辺月

三一九 きよみがた月すむ空のうきくもは富士のたかねのけぶり成けり

は、『別本山家集』に同題で異文も無く載る(三四番)。他の西行家集にはこの歌は載らない。それが、『歌仙落書』⁽²⁾

には、登蓮法師の歌として、同題で第二句「月すむよはの」の形で載る(群書)。第三句を「村雲は」とする本も

ある。また、『統拾遺集』にも、「月の歌の中に 登蓮法師」として第二三句「月すむ夜はの村雲は」⁽³⁾の形で入集

している(国歌大観⁽¹⁾三十一番)。以上の事実は、既に博く知られており、日本古典文学大系『山家集金槐和歌集』の頭注に

「統拾遺五、登蓮法師の歌に(引用)とある。異伝か誤伝か、それとも偶然的符合か、いま俄かには定め難い」と

あり、『中世の文学 歌論集一』所収『歌仙落書』⁽²⁾の頭注にも「統拾遺秋下三十一、山家集(国歌大観本七三〇

三三)『海辺月』西行歌として見ゆ。不審」とある。この歌は、既に先覚が詠者存疑とされているのである。

『歌仙落書』には伝本が多く、詠者誤伝の多い伝本もある由だが、この歌は諸本の間に出入りはない。また、

先覚の御指摘のとおり、この書は『治承三十六人歌合』に組成・所載歌両面で影響している。⁽⁴⁾しかも、西行在世

中の成立で、当時の歌の詠者認定の為の証拠価値は高い。また、『統拾遺集』の方も、諸本がこの歌を登蓮詠と

しており、問題は無い。

要するに、この歌は、『歌仙落書』『統拾遺集』両書の詠者の正確度の調査を始めとして、本稿同様の手続きの

吟味を要する詠者存疑歌なのである。このように、『山家集』には、そして『別本山家集』には、問題の歌の他

にも存疑歌が載るのである。

『別本山家集』に存疑歌が在ることは、今の例でも判るが、いま一例を示して、『山家集』に比べて存疑歌をめ

題しらず(但、六九
二番詞書)

七〇〇 藤ごろもかさぬる色は深けれどあさき心のしまぬはかなさ

は、『別本山家集』では、六九二番に始まる「題しらず」十首中の一首で、西行歌の扱いである。ところが、この歌を、『山家集』は、

右大臣公能、父の服のうちはなくなりぬときゝて、高野よ

りとぶらひ申ける

七八五 かさねきるふちのころもをたよりにて心の色をそめよと思ふ
という西行歌への公能の返歌とする(六七八)。『山家心中集』(秘法院本、三)と『月詣集』(群書類従本、卷一〇哀傷)も同様である。つまり、「藤衣」の歌は、証拠価値の高い外部徴証で、公能詠と確認できるのである。

因みに、『西行上人集』(四〇番)と『玉葉集』(二三四番)には西行の贈歌「かさねきる」のみが載り、「藤衣」という公能の返歌は載らない。しかも、注目されるのは、『別本山家集』も「かさねきる」の歌は別に単独で載せ(六八)、『西行上人集』や『玉葉集』と同じ扱いをするという点である。とにかく、「藤衣」の歌は、『別本山家集』が西行詠とするのは誤りなのである。

「重ね着る」「藤衣」の二首は、西行家集としては、『山家集』等のごとく贈答が本来か、『西行上人集』のごとく西行単独詠が本来か、今のところ、稿者には判らない。が、『別本山家集』は、六八九番として、『西行上人集』同様に単独詠の形を採りつつ、七〇〇番において、『山家集』等に載る公能の返歌をも西行詠と誤って収めた、と推測できる。つまり、『別本山家集』は『山家集』より後出の本文なのである。

『西行上人集』の「追加」には、先覚の御指摘があるように、存疑歌・誤伝歌が多い。例えば、

前大納言成通、世をそむきぬときゝて遣しける

六三八 いとふべきかりのやどりはいでぬなり今はまことの道を尋よ

は、『玉葉集』にも「前大納言成通、世をそむきぬと聞きていひつかはしける 西行法師」(二四六番)として載る。ところが、『月詣集』(卷九 雑下)では、

大納言成通卿かしらおろし侍りたりけるに遣しける

西住法師

いとふべきかりの宿りは出にけり今はまことの道を尋ねよ

かへし

大納言成通

同じくは道ひきつけよかりの宿たれにひかれて出しとかしる

(群書類從)

と、西住と成通の贈答とする。西住には家集が伝わらず、また、『成通集』にはこの贈答が載らず(私家集大成、神宮、家集では確認の手だてが無い訳である。が、『月詔集』は、前述のとおり、詠者認定の為の証拠価値が高い。しかも、この集は西行を「円位法師」とする訳で、転写の間に「西行」と「西住」という誤写があったと考える必要もない。こうなると、この歌は西住の詠と認めてよからう。従って、『西行上人集』の「追加」にこの歌が西行歌とあるのは、既に誤っていた『玉葉集』のごときものを引いた為であると考えられる。既に誤っていたその集が如何なる原因で誤ったか、それは判らないが、この歌が例の西行と江口遊女の贈答歌と似る点があるのも、一因かも知れない。

いま一例、『西行上人集』の「追加」の誤伝歌を例示したい。

花山院の御庵室のほとりにて

(但、六九〇番詞書)

六九五 すわの海に氷すらしも夜もすがらきそのあさぎぬさえわたる也

は、詞書と歌の間に齟齬がある。実は、この歌は『久安百首』の藤原清輔の歌で(群書類從)、『万代集』にも「久安百首に 清輔朝臣」とある。『西行上人集』の「追加」は誤りという訳である。こうなると、六九〇番の詞書「花山院云々」はこの六九五番の歌にまでは及ばないということになる。つまり、この歌は詞書を欠くと見てよい訳である。詞書を脱すというふうな誤謬を併せて、『西行上人集』の「追加」には、誤伝歌が他にも多いのである。

『万代集』にも、詠者存疑の歌が散見する。

題不知

中納言家持

秋の夜の庭のしら露けさみれば玉やしけるとおどろかれつゝ(巻四、丹
籙叢書本)

は、『三十六人集』の『家持集』に載る。即ち、西本願寺本では「秋歌」一七六番と二二四番(但、結句「おも」、書
めかれつゝ)、書
陵部藏御所本では「雑歌」二一九番に載る(私家集
大成所収)。ところが、『忠岑集』にもこの歌は忠岑歌として載るのである。書陵部藏「五二八」本の一〇番(但、「秋の野」はきの
つゆ)・書陵部藏御所本の一七七番(但、「たきをしけ」とする
るところ)という具合である。それに、『後撰集』にも、「延喜の御時
歌めしければ 忠岑」として、初句「秋の野に置く白露を」の形で載り(三〇、
九番)、『古今六帖』も忠岑詠とする(国歌大観
三一四四九)。以上は、『後撰集』研究では既に知られた事実なのである。

『万代集』がこの歌を家持歌とするのは、撰歌資料『家持集』に依る訳で、この集そのものの誤りではない。『忠岑集』との異文を見ても、それは判る。が、この歌が詠者存疑歌であることは間違いない。

『万代集』の詠者誤伝の例を一首示したい。

だいしらず 斎宮女御

かくばかりまつちの山のとゝぎす心しらでやよそに啼らん(三卷)
は、『斎宮女御集』の本文を追ってみると、

又まかで給て、五日までまいり給はざりければ

二八 さとにのみなきわたるなるとゝぎすわがまつときになどかつれなき

返し

二九 ほとゝぎすなきてのみふるこゑをだにきかぬ人こそつれなかりけれ

ときこへ給たりしに、うちのきかぬとありしかばとて

三〇 かくばかりまつちの山のとゝぎす心しらでやよそになくらん(私家集大成所
収、書陵部本)

とあり、「かくばかり」の三〇番は村上天皇の詠なのである。西本願寺本『三十六人集』の「さいぐうの女御」

一〇〇番(私家集大成本)や『村上御集』三七番・一三四番(私家集大成所収
一代々御集本)でも村上天皇詠であり、『続古今集』も「題

しらず 天曆御歌^(九)とする。『万代集』の誤りの原因は種々あろうが、換歌資料が、『斎宮女御集』であれ『村上御集』であれ、他撰であるため、天皇にも女御にも敬語が使われているところから、誤解が生じたと見える。尤も、この歌が、本歌と関わって、女性の「待恋」の歌ともとれる、ということも与ったであろうが。

問題の「何故か」の歌の場合、『万代集』『続古今集』双方が誤っていた訳だが、この歌の場合、『万代集』は誤り『続古今集』は正しい。敢てこの歌を例示した所以である。

『続古今集』にも、詠者誤伝歌が散見する。

同じころ 菊^(残)を 延喜御歌

五九八 散り果てゝ花なき時の菊なれば移ろふ色の惜くもある哉^(大観)
 は、正しくは、延喜十三年十月十三日『内裏菊合』⁽⁸⁾の藤原興風の歌である。但し、ここでは、第三句が「花なれば」とある。『興風集』にはこの歌は見えないが、『続千載集』には「延喜の御時菊合に 藤原興風」^(四五六)として第三句「花なれば」の形で、『万代集』にも「延喜十三年内裏菊合に 興風」として下句「いくたび折てかざしきぬらむ」の形で、正しく撰ばれている。稿者は『続古今集』の詳しい本文調査も全歌の詠者確認も試みた訳ではないが、このように、この集には詠者誤伝歌が散見するのである。

以上のとおり、『山家集』『別本山家集』『西行上人集』の「追加」や『万代集』『続古今集』には、他にも誤伝・存疑歌が在る。問題の「何故か」の歌が唯一の存疑歌なのではない。これは、問題の歌をこれらの集が西行歌とするのも誤謬であり得る、と証する為の有力な状況証拠なのである。

へ八へ

『山家集』『別本山家集』や『西行上人集』の「追加」、あるいは『万代集』『続古今集』が「何故か」の歌を西行歌とするのは誤りであることが判った。では、どの集が最初に誤り、それがどのように伝わったのか。以下、数節にわたり、問題の歌をめぐる西行家集等の流れについて検討したい。

本稿の冒頭に、問題の歌の諸集における詞書を示した。その折に言及せずにおいたが、『西行上人集』の「追加」では、詞書と「何故に」の歌の間に齟齬がある。そのあたりの問題から、検討を始めてみることにしたい。

『西行上人集』の「追加」の問題の歌の詞書以下は、

東国修行のとき、ある山寺にしばらく侍て

七二八 山たかみ岩ねをしむる柴の戸にしばしもさらば世をのがればや

七二九 雲にまがふ花の本にてながむればおぼろに月はみゆるなりけり

七三〇 ゆふざれやはらがみねをこへ行ばすこくきこゆる山ぼとのこゑ

七三一 さらぬだに世のはかなさを思ふ身に鵲鳴わたるしのゝめの空

七三二 秋たつと人はつげねどしらけり太山のすその風のけしきに

七三三 いかに我きよくくもらぬ身と成て心の月の影を見るべき

七三四 君もとへ我もしのばん先だゝば月を形見におもひ出つゝ

七三五 何ゆへに今日まで物をおもはまし命にかへて逢世なりせ□

七三六 うきをうしとおもはざるべき我みかは何とて人の恋しかるらん

である。七三七番で詞書が「題不知」と変り、形の上では、以上の七二八番から七三六番までが一まとまりに

なっているのである。

七二八番は確かに詞書と歌の内容とが合致する。が、七二九番は春、七三〇番は旅、七三一番は無常、七三二番は秋、七三三・四番は釈教・述懐の月の歌、七三五番が問題の恋歌、七三六番も恋、という具合で、「東国修行のとき云々」という詞書とは関連がない。

七二九番以降は詞書が欠けていることになる訳だが、それは、以上の歌の他集における詞書を見ても判る。「東国修行のとき云々」の七二八番は他集に見えない歌だが、その他の歌は、

七二九「花のしたにて月をみてよみける」(山家集^九)・「花蔭にて月見る処」(別本^二)・「花の下にて見月といふ心を」(心中集^{三八})・「花のしたにて月をみて」(上人集^{一九})。『西行物語』にも載る。

七三〇「暮山路」(山家集^{一〇})・「山路夕」(別本^七)・「家集タぐれの山路」(夫木^{二七})

七三一「だいしらず」(山家集^{七五})・別本^{六九}・「家集雑歌中、鴛」(夫木^{二七})

七三二「山居初秋」(山家集^{二五})・別本^{二七}。『西行物語』にも載る。

七三三「心におもひける事を」(山家集^{九〇})。『西行物語』にも載る。

七三四「西行物語」に載る。「折ふし、その夜、月おもしろかりければ」とある。

七三五「問題の「何故か」の歌。詞書は既掲。

七三六「恋の歌五首よみけるに」(松屋本山家集)・「恋の歌よみけるに」(別本^七)・「題しらず」(万代^三)・続古今^{八三})・「恋歌とてよめる」(雲葉^五)。

といった具合に、他集ではそれぞれの歌に合う詞書を備えているのである。これを見ても、『西行上人集』の「追加」に於ける問題の歌の前後は、詞書を省いて歌のみを載せているということが判る。⁽¹⁰⁾問題の歌が詞書と齟齬するのも当然なのである。前節で、六九五番を例にして、「追加」には詞書が省かれた結果としての存疑歌があるということ、殊更に例証した所以である。

存疑といえ、今見た歌の内、七二八番について、伊藤嘉夫氏が「読み口は西行であるが、他に確かな出典が

一六	四五・一四四・六	玉葉	六一六	一一	夫木卷三一
一七	二九〇・三二五	西行物語 新古今	三六七	一二・一四三八	
一八		御二右 玄玉 卷七 新古今	五三八	一三	夫木卷二三
一九		宮二〇左 玄玉 卷三 西行物語 新古今	五八五	一四・一三八四	夫木卷二六
六二〇	五〇三・四七八	万代 卷六 統後撰 西行物語 新古今	四五・一	一五・一三八八	夫木卷三〇
二二		玄玉 卷二 西行物語 新古今	二六二	一六・五四五・五三一	夫木卷三〇
二二		新古今	二六三	一七・四三九	
二三	五一九五〇・五	玉葉	九〇四	一八	
二四	五一七五〇・三	夫木卷一六 玉葉	九〇五	一九	聞一九五
二五	九五〇	千載	一二七・五七二・〇		
二六	二二〇七・九三八	夫木卷三〇 玉葉	二二三・二	二二・六六二	
二七	二一四〇	玉葉	一一一一	二二	
二八	一一〇一・九五二	月詣卷三 旅千載	五一五	二三・一一五・七二三	西行物語 御二三左 唯心房集 卷三 新勅撰
二九			二四・一一七		
六三〇		西行物語	二五		
三一		西行物語	二六		
三二	一一三四	玉葉	一一八九	二七	西行物語
三三	八〇二	玉葉	二二六・五	二八	
三四		新古今	八三七	二九	上人集 出二一 西行物語
三五	八一七	玉葉	二三三・二七三・〇	一〇・五二七・二九	夫木卷二一

[illegible]

注、ゴチックで示した集は、西行詠とはせず、別人詠として収める。「西行物語」は、略本系正保三年版本を底本とする講談社学術文庫本（桑原博史氏著）に依る。

ない⁽¹¹⁾」と言われ、七三四番について、伊藤氏が「他に所見のない歌」、尾山篤二郎氏が「未だ真偽不明⁽¹²⁾」と疑われた。前者は他集に見えず、後者は『西行物語』のみに載る歌である。このように、「追加」の問題の歌の前後には、西行詠が既に疑われている歌が他にも在る訳である。

以上で、問題の歌が他集から『西行上人集』に追加されたことは確認できた。が、出所は未だ判らない。その問題の検討の為に、「追加」の全歌の他文献所収状況を調べると、先の一覧の様になる。

この表に依り、「追加」一八九首の内『山家集』所載歌は一〇二首(五割四分)のみであること、『山家集』の歌順とは全く関係が無いこと、などが判る。『山家集』は「追加」に与ってはいないと見てよい。『山家集』の歌数は、陽明文庫本で一五五二首⁽¹³⁾、一方、『西行上人集』の歌数は、李花亭文庫本で五九七首⁽¹⁴⁾で、この差を見ても、『山家集』で追加するなら一〇二首で済むはずがないと言える。

「追加」と重なるのが四八首の『別本山家集』、六首の『山家心中集』、一五首の『聞書集』、四首の『残集』、九首の『御裳濯河歌合』、六首の『宮河歌合』も、総歌数の差から考えて、この程度の追加で済むはずが無い訳で、これらも「追加」には関与していないと見てよい。

要するに、『西行上人集』の「追加」は、西行の家集や自歌合から歌を追加したのではなく、西行家集以外の文献で西行歌とされている歌を拾って追加した、と見てよいのである。

尤も、その拾遺はさほど厳密に行なわれた訳ではない。前述のごとく、詞書が省かれることもあり、ゴチャクで示したように誤伝歌も多い。「上人集既出」と注記したとおり、『西行上人集』に既に載る歌が七首も追加され、結果的には重複してもいる。不徹底・杜撰の謗はまぬがれまい。

このように不徹底・杜撰な面はあるものの、「追加」の歌の他文献所収状況を見ると、勅撰集入集歌の集中する部分、『夫木抄』所載歌の集中する部分、『西行物語』⁽¹⁵⁾所載歌の集中する部分という具合に、「追加」には、出所に依ると思われる歌の集中が割合明確に認められる。尤も、勅撰集の順やその歌順、『夫木抄』『西行物語』の

所載順とまでは合致しない。「追加」に「次第不同」と断つてある所以であらう。が、「追加」の順は資料が与つてゐるとは見てよいであらう。

「追加」の資料に勅撰集や『夫木抄』があると述べた点に関して、一つ付け加えたいことがある。

『西行上人集』李花亭文庫本の末尾、つまり「追加」の直前に、「観応貳年^{辛卯}七月日 修行者周嗣判」という、

一三五一年の奥書がある。従つて、「追加」が行なわれたのはこれ以後である。確かに、延文四年^(一三)成立の

『新千載集』入集歌である七四五番あたりが、「追加」の勅撰入集歌の下限である（尤も、この歌は『万代集』『西行物語』に依る追加の可能性もあるが）。そして、『新拾遺集』以降の三勅撰集に、『西行上人集』に載らず、従つて追加されてもよいはずの西行歌があるにもかかわらず、それが追加されない例がある。この事實は、「追加」

は観応二年をさほど降らず貞治三年^(六四)の『新拾遺集』成立以前に行なわれたことを示している。少なくとも、「追加」の資料に『新千載集』以前の勅撰集があった、とは言える。

『夫木抄』の成立年代には諸説があるが、延慶三年^(一〇)頃のように、「追加」の上限の観応二年より前であり、この集は「追加」の資料になり得る。『万代集』も、「宝治二年夏頃撰定^(七)了」という奥書に依れば、一二四八年の成立で、問題は無い。

「追加」の初めの部分は、『西行物語』の歌が集中している。但し、この物語との関係は軽々しく云々できない。稿者の調査は正保三年版本を底本とする桑原博士著『西行物語全訳注』⁽¹⁵⁾に依るが、この物語には異種本が多く、その本文調査と「追加」所載歌を比較するという手続きが必要である。それに、正保三年版本の本文の成立時期も不明である。ただ、この物語は桑原氏も「鎌倉時代中期およそ十三世紀なかばには成立していたであらう」とされておき、「追加」の為の資料とされた可能性はある、とは見てよい。

以上、『西行上人集』の「追加」は、『山家集』とは無関係らしいこと、資料に依つて歌が集中していること、

その資料に、西行家集以外の文献が想定できること、等を種々の証拠に依って示してみた。これらは、実は、問題の「何故か」の歌が「追加」に収められた事情を推理する為の、有力な状況証拠なのである。

『西行上人集』の「追加」の問題の歌(七三五番)の前後は、おおむね『山家集』に載る歌ではある。が、直前の七三四番は『山家集』に載らず、直後の七三六番も松屋本には載るが六家集本系『山家集』には載らない。やはり、この歌の前後は『山家集』とは無関係と見てよい。『別本山家集』『山家心中集』等とも関係が無い。つまり、問題の歌を含めて、この部分は西行家集に依ってはいないと見てよい訳である。

注目されるのは、問題の七三五番と続く七三六番が共に『万代集』と『続古今集』に載る、という事実である。いずれかに依って問題の歌が追加された可能性が大きいと言える。

但し、「追加」に載る歌で『万代集』にも載る歌は、八首のみで、後に示すように、これは『西行上人集』不載歌を補うには程遠い数である。しかも、さきの表でも判るように、その八首は「追加」に散在し、集中してはいない。『万代集』は、成立年代の点では「追加」の資料であり得るが、直接には資料とはされなかったと見てよい。

『続古今集』はというと、問題の「何故に」の歌に続く七三六番も『続古今集』入集歌であり、以下、『続千載集』『玉葉集』『続後拾遺集』『新千載集』と、勅撰入集歌が七四五番まで続いて並んでいる。問題の歌に続いて勅撰入集歌が集中しているという事実からすると、問題の歌は、『続古今集』から『西行上人集』に追加された、と判断するのが、今のところ最も妥当と考えられる。

へ九

『西行上人集』の「追加」に「何故に」の歌が載るのは『続古今集』入集西行歌を拾ったことに依る、ということがほぼ明らかにできた。次なる課題は、『続古今集』はこの歌をどこから撰んだか、である。勿論、問題の歌を

西行歌とする『山家集』『別本山家集』『万代集』のいずれかである可能性が強い訳だが、この集での誤りかも知れず、白紙に戻して考えたい。

まず、『治承三十六人歌合』そのものは『統古今集』の撰歌資料ではないということを明らかにする必要がある。次に掲げる表が、『統古今集』入集歌で『治承三十六人歌合』に載る歌の他文献所収状況を示すものである。

『統古今集』入集歌中の『治承三十六人歌合』所載歌

統古今集	初句	「治承」	歌合	私家集	私撰集	備考
一二〇 故郷の	成範	二			雲葉卷二・万代卷二	
五五一 袖ぬらす	実定	六			歌仙落書七・万代卷六・玄玉卷三	知家トモ。
七二八 宮居せし	経家	一〇		経家集 九一		
八六二 そへてやる	祐盛	九三百六十番歌合				
九二一 袖ぬらす	俊成	六			長秋詠藻 二六二 歌仙落書二九・統詞花卷一五・玄玉卷三・雲葉卷八	
九六六 恋しとも	俊成	七久安百首・恋		長秋詠藻 二二五 歌仙落書三三		
* 一〇七七 何故に	経盛	八		山家集等	万代卷一〇	
一七二七 寝覚して	頼輔	一〇		頼輔集	一〇八 統詞花卷一八	西行歌トス
一七五三 今はわれ	実定	四		林下集	二九七 万代卷一五	
一八六二 思出も	祐盛	一〇 清輔歌合三四右				
一九二三 君が代は	頼政	一〇 実国歌合祝四左	頼政集	三一五		

注、「初句」は『国歌大観』に依る。「私家集」の——印は、私家集の云存しない歌人であることを示す。「歌仙落書」の歌番号は、「中世の文学 歌論集」に従う。

これで判るように、この十一首は全て他の歌合・私家集・私撰集に載り、『治承三十六人歌合』以外に出所はありえない、という歌は無い。言及する紙幅は無いが、本文の面でもこれは確認できる。

『統古今集』撰歌の件に移る。歌合や私家集はどの勅撰集でも撰歌資料としたはずだから、殊更には吟味しない。ただ、私撰集については、一二〇番と五五一番が私撰集のみに載ることもあり、『万代集』が『統古今集』の撰歌資料たり得る点を以下に示したい。

この十一首の内に、問題の歌を含めて、『万代集』にも載る歌が四首ある。実は、『万代集』所載歌で『統古今集』に入集する歌は、丹鶴叢書本に示された勅撰入集注記に依ると、二六二首に上る。従って、『治承三十六人歌合』『万代集』『統古今集』三者に載るこの四首は、『治承三十六人歌合』から『統古今集』に撰ばれたのではなく、『万代集』から『統古今集』に撰ばれた歌の中の四首、と見た方がよい。

『歌仙落書』と『統古今集』の関係も、同じことが言える。この十一首中に『歌仙落書』にも載る歌が三首あるが、『歌仙落書』所載歌で『統古今集』に入集する歌は、この三首に限られる。前述のごとく、『歌仙落書』は組成と例歌の両面で『治承三十六人歌合』に影響していると、先覚が指摘しておられる。⁽⁴⁾従って、この三首は、『歌仙落書』から『治承三十六人歌合』に継承されたもので、『歌仙落書』から『統古今集』に撰ばれたのではあるまい。五五一番は『万代集』あたりから、九一一・九六六番は『長秋詠藻』あたりから、『統古今集』に撰ばれたのであろう。とにかく、『歌仙落書』は『統古今集』の撰歌資料ではなく、『治承三十六人歌合』も『統古今集』の撰歌資料ではないと言ってよい。

では、『統古今集』は問題の歌をどこから撰んだのか。『山家集』『別本山家集』からの可能性は勿論、今述べたように、『万代集』からの可能性もある。この問題の検討の為に、勅撰集入集西行歌と西行諸家集の関係の調査が、廻り道だが、有力な状況証拠となろう。

新統古今集	新後拾遺集	新拾遺集	新千載集	風雅集	統後拾遺集	統千載集	玉葉集	新後撰集	統拾遺集	統古今集	統後撰集	新勅撰集	新古今集	千載集	詞花集																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
-------	-------	------	------	-----	-------	------	-----	------	------	------	------	------	------	-----	-----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

先の表が、勅撰集入集西行歌と西行家集等との關係を歌数の面で示すものである。数のみであるから、目安ではないが——勅撰集入集西行歌の本文の吟味は、別に報告する所存である——、この表で、重大な事実が指摘できる。

当面問題の『統古今集』に続く『統拾遺集』以後の勅撰集入集西行歌は、殆んど『山家集』と重なる。即ち、『新後撰集』『統千載集』『統後拾遺集』『新千載集』『新後拾遺集』『新統古今集』の入集歌は全て『山家集』所載歌であり、『統拾遺集』『新拾遺集』の入集歌も、『山家集』に載らないのは各一首に過ぎない。入集歌の比較的多い『玉葉集』『風雅集』でも、『山家集』に載らない西行歌はそれぞれ四首と二首という具合に少ない。このように、『統拾遺集』以後の勅撰集入集西行歌は『山家集』と重なることが多い訳だが、『別本山家集』は別として、他の集は、『山家集』程には入集歌を覆えないのである。

ところが、問題の歌を載せる『統古今集』以前の勅撰集では、状況が少々違う。「読人不知」とされる『詞花集』入集西行歌は、『西行上人集』『別本山家集』には載るが、『山家集』には載らない。『千載集』入集十八首は、『山家集』と『西行上人集』に同数の十六首載る。『別本山家集』は『千載集』入集歌全てが載る訳だが、これは、巻首遊紙に追加された歌(九五〇番)が全て『千載集』入集歌の拾遺という特殊事情があり、他と同列には扱えない。『新古今集』の九十四首の西行歌の内、『山家集』に載るのは四十二首(四割五分)のみだが、『西行上人集』所載歌は六十四首(六割八分)にもなる。『別本山家集』も六十三首と多い。『新勅撰集』と『統古今集』の場合、『山家集』所載歌より『西行上人集』所載歌の方が一首多い。しかも、『統古今集』では、問題の歌を除くと、『西行上人集』所載歌の方が『山家集』所載歌より二首多いのである。

例外は『統後撰集』のみで、この集は『西行上人集』よりも『山家集』と重なることの方が多い。いま一つ、『別本山家集』と勅撰集の重なるの多いことも要注意だが。

このように、『統古今集』以前の勅撰集入集西行歌は、『統後撰集』は別として、『西行上人集』との重なりが多く、『統拾遺集』以後の勅撰集入集西行歌が『山家集』と関わるということが判った。これは、言及する紙幅

は無いが、本文の面の検討でも齟齬するところは無い。『統古今集』以前は、『山家集』が資料ではないらしい。以上のような、勅撰集入集西行歌との重なり具合という状況証拠からすると、問題の歌は、『山家集』から『統古今集』に撰ばれたとは考えにくい。しかも、この歌は『西行上人集』には載らない訳だから、残る集、つまり『別本山家集』か『万代集』から『統古今集』に撰ばれた、と考えてよからう。

『統古今集』入集西行和歌一覽

統古今集 (歌番号)	初句	山家集 (松屋本)	山家集 別本 山家集	西行上人集	上入集 追加	心中集 御裳瀧 河歌合	治承 三十六月詠集 万代集 人歌合	その他	備考
七〇一 神かぜに					六〇八	二左		御裳瀧集春中	
一〇二九 袖の上の		一二七二			三六一				本稿で問題の歌。
一〇七七 何故に		六五九六三一			七三五				
一三四五 浮世をば					三五七			卷一〇	
一三四六 問へかしな		一二八五			三六二			卷一三	
一三八二 憂をうしと	松	四一五七七			七三六			卷一三 雲葉恋五	山家集は松屋本のみ。
一四四七 誰とても					七二二				
一四九一 かたぐに		六七六三九四						卷九 雑	
一五二八 わきて見む		九四一二五			六〇	一八五			
一五三五 ねがはくば		七七一一七			五二	七左		新古今集一八四五切出松屋本不載歌。長秋詠藻	

注、『宮河歌合』『聞書集』『残集』は、『統古今集』入集歌が載らない。『初句』は『国歌大観』に依る。

そのいずれか、それを吟味する為に、『続古今集』入集西行歌を、いま少し詳しく見てみたい。前頁に示す表が、『続古今集』入集歌と西行家集等との関わりの歌番号の一覧である。

この表で注目されるのが、『西行上人集』である。この集は、『続古今集』入集西行歌十首の内の六首を載せ、李花亭文庫本では残る四首が「追加」に載る。つまり、「追加」は、『西行上人集』に載らない『続古今集』入集歌を全て拾っているという訳である。因みに、前掲「勅撰集入集西行和歌歌数一覧」でも、『千載集』『続後撰集』『続拾遺集』『続千載集』『続後拾遺集』に同様のことが見てとれ、入集歌の多い『新古今集』や『玉葉集』でも、『西行上人集』所載歌と「追加」とを併せると入集全歌数に近くなる。

以上は、前節の補ないではあるが、『西行上人集』の「追加」は勅撰集入集歌の拾遺も多く、問題の「何故に」の歌も、その例と言つてよい。

『続古今集』入集西行歌十首の出所の件に戻る。前節で論証し、今も補なつたように、『続古今集』から『西行上人集』「追加」への流れは間違いない訳だから、他集には見えない『続古今集』一四四七番は現在のところ出所不明であることになる。佐佐木信綱氏等編『西行全集』⁽²⁰⁾の「西行法師和歌拾遺」は、この歌を「山家集・聞書集・同殘集・西行法師家集に所見なくて、出典正しき西行歌」とする^(五〇六)が、現在の資料条件では、出所不明とした方がよい。

七〇一番は『御裳濯河歌合』のみに載る歌であるから、この歌合から『続古今集』に撰ばれたと見てよい。一五三五番も、全ての西行家集が出所として想定はできるが、『御裳濯河歌合』所載歌であることが大きく与つたと言えよう。

次に注目したいのは、『山家集』や『別本山家集』でなければ『続古今集』の出所は無いという歌は皆無である、という事実である。同集所載の『続古今集』入集歌は、全て、他の集にも載る訳で、そこから『続古今集』

に撰ばれた、という可能性があるからである。

ところが、『西行上人集』でなければ『統古今集』の出所は無い、と考えられる歌がある。現在の資料条件では『西行上人集』以外に載らない一三四五番がそれである。しかも、続く一三四六番も『西行上人集』所載歌であるという事実を併せ考えると、この推測はほぼ確実となると言える。尤も、一三四六番の方は『万代集』『山家集』に載ることも与ったのかも知れない。が、並んだ二首のうち、『山家集』は片方のみを載せ、『西行上人集』は双方を載せるというのだから、二首とも『西行上人集』に依ると判断するのが自然であろう。一三四六番は、『山家集』や『万代集』にも載ることも参考にされたというのが実態かも知れないが、撰歌の主資料は、やはり、『西行上人集』であると見ておく。

一三四六番と同様、一〇二九番も、『山家集』『西行上人集』両集に載るが、これも『西行上人集』から撰ばれたと見たい。というのは、一三四六番は『西行上人集』の三六二番だが、その直前の三六一番が『統古今集』の一〇二九番であり、『西行上人集』ではこの二首が連続して並んでいるという事実があるからである。勿論、『山家集』でもこの二首が「恋百十首」という同一の歌群の中に載るという事実も、『統古今集』入集に与ったかも知れない。尤も、「恋百十首」は後述のように、種々問題がある歌群のようだが。

一三八二番は、松屋本『山家集』や『別本山家集』『万代集』に載る。この歌が六家集本系『山家集』に載らないという点は注目されるが、松屋本の検討も要しよう。『統古今集』入集歌で『山家集』に載る他の五首の内、一〇二九・一〇七七・一三四六・一五二八の四首は松屋本にも載るが、一五三五番は松屋本に載らない。とすると、『統古今集』の撰歌に松屋本は与っていないと考えてよい。従って、一三八二番も『万代集』か『別本山家集』から『統古今集』に撰ばれた、と考えられる。

そのいずれかという点、『万代集』だったようである。というのは、『万代集』では、卷十三において、この『統古今集』一三八二番の歌と一三四六番の歌が連続して配されているからである(三九六頁)。一三四六番が『別本山家集』に載らないという事実を併せ考えると、一三八二番は『万代集』から撰ばれたと見てよい。従って、

一三四六番の撰入にも『万代集』が与ったと考えられる。

問題の「何故か」の歌も『万代集』所載歌である訳で、ここで、成立年代の点でも当然なのだが、『万代集』から『続古今集』への流れが確認できたことは、注目してよい。

残る一四九一・一五二八番について言及しておく。二首とも『西行上人集』所載歌であり、そこからの撰歌の可能性が強い。但し、前者は『月詣集』に入集しているという事実も与ったかも知れず、後者は『山家集』『別本山家集』の外に『山家心中集』にも載り、それらも撰歌の参考とされたかも知れない。しかし、いずれにせよ、『西行上人集』が撰歌の主資料と判断してよい。

『続古今集』入集西行歌十首の内の九首について、撰歌の主資料を推理した。残る一首、つまり問題の「何故に」の歌は如何という、一三四六・一三八二番の歌で明らかにできた、『万代集』から『続古今集』へ、或いは、『万代集』所載歌であることが『続古今集』入集に与ったらしいという事実は、重要な状況証拠である。

問題の歌は、かような状況証拠に依れば、『万代集』において西行歌とされるままに『続古今集』に撰はれた、と見るのが妥当である。

〈十〉

『続古今集』が「何故に」の歌を西行歌とするのは『万代集』に依る、ということがほぼ明らかにできた。従って、『万代集』は、問題の歌を『山家集』もしくは『別本山家集』から撰んだ為、西行歌と誤った、ということになる。そのいずれかという件を、以下に検討したい。

まず、『治承三十六人歌合』そのものは『万代集』の撰歌資料とされたと考える必要がない、ということを明ら

『万代集』所収の『治承三十六人歌合』所載歌一覽

万代・巻	初句	治承歌人番号	歌合所載	私家集	私撰集	勅撰集	注
二	ふる郷の	成範 二			雲葉巻二	統古今 一二〇	
三	山崎と	寂超 三				統拾遺 一六九	
四	露しげき	師光 二		師光集追加一〇三	歌仙落書 一四 玄玉巻三	新統古今 四一五	
五	露ふかき	寂然 四			歌仙落書 七 玄玉巻三	統古今 五五一	
六	袖ぬらす	実定 六				統古今 六七三	
六	散つる	寂然 五		寂然法師集 五四	歌仙落書 一一五	新千載 六七三	
六	在明の	俊恵 八		林葉集 六五八	夫木巻二六		
六	暮ゆくを	成仲 五			月詔集十二月		
七	宮あせし	経家 一〇	三百六十番	経家卿集 九一		統古今 七二八	統古今、知家トモ
八	あまくもや	顯昭 一〇	三百六十番				
八	何となく	寂然 九			統詞花巻一〇		
*一〇	何故か	経盛 八		山家集・別本など		統古今 一〇七七	西行歌トスル
一五	今はたゞ	実定 四		林下集 二九七		統古今 一七五三	
一八	かくれにし	寂信 九		别当入道集 二二三		玉葉 二二九〇	
一九	さりととも	師光 八	三百六十番	師光集 八六		新後撰 一四一〇	

注、『万代集』初句は『丹鶴叢書』に依る。私家集の「――」は、当人の私家集が伝存しないことを示す。『歌仙落書』番号は、『中世の文学 歌論集』に依る。

かにしておきたい。

前頁の表が、『万代集』所載歌で『治承三十六人歌合』に載る歌について、他集の所収状況を対照したものである。

この表で判るように、問題の歌を除く十四首中の十一首は、『万代集』に先行する歌合や私家集等に記載り、さような文献から『万代集』に入ったと見てよい。

残る三首は、巻二の成範歌(『雲葉集』『続古今集』は『万代集』以後の撰)、巻三の寂超歌(『続拾遺集』は『万代集』以後の撰)、巻四の師光歌(『新統古今集』は『万代集』以後の撰。『源師光集』では勅撰入集歌を追加した末尾六首中に載り、『新統古今集』を引いたもの)²²⁾である。この三首については、『万代集』に先行するのは、『治承三十六人歌合』のみということになる。

但し、成範と寂超には家集が伝存せず、師光の家集『源師光集』はいわゆる寿永百首で、九十九首の歌を以て編まれた歌数制限のあった特殊な家集である。つまり、三人とも、現在の資料条件では、『万代集』の撰歌資料となる家集が判然としないのである。『治承三十六人歌合』を『万代集』の撰歌資料とすると好都合だが、『治承三十六人歌合』の為の資料があったのと同様に、現在では未知の文献が『万代集』の撰歌資料されたと見たい。

因みに、成範歌の『万代集』の詞書は「故郷花」だが『治承三十六人歌合』の詞書は「故郷」であり、寂超と師光の歌は『万代集』では「題しらず」だが『治承三十六人歌合』ではそれぞれ「郭公」「秋の歌よみける中に」『新統古今集』も「秋の歌の中に」という詞書である。詞書のみを見ても、『治承三十六人歌合』が『万代集』の資料とは言い切れないのである。

この点に関連して、いま一つ注目されるのは、『万代集』には、問題の歌以外は『治承三十六人歌合』所載西行歌が一首も採られていない、という事実である。後述のごとく、『万代集』には、問題の歌以外に、西行歌が四十八首も載る。これだけの多さであるから、『治承三十六人歌合』所載西行歌十首の中、『千載集』入集歌(一首目)と『新古今集』入集歌(二首目・八首)を除く残りの五首などは、『万代集』に採られても不思議ではない。という

のは、先覚も指摘されるように、『万代集』は勅撰集の撰歌資料を目ざした面があり、事実、西行歌に限っても、先の残りの五首中の四首までが『万代集』以後の勅撰集に撰ばれており、その五首の出来が悪い訳でもないのだから。にも拘らず、『治承三十六人歌合』の西行歌十首が『万代集』に載らないのは、これが撰歌資料ではなかったからだと言えそうである。

本題に戻り、『万代集』の問題の歌の出所は『山家集』か『別本山家集』か、この件の検討の為に、『万代集』所載西行歌の西行家集等との重なり具合を歌数の面で整理したのが、次の表である。この表で判るように、『万代集』所載西行歌四十九首中四十二首（八割六分）が『山家集』に載る。松屋本では、六家集本系に載らない歌が二首増え、松屋本に欠ける歌が一首減り、都合一首増える。この数と、『別本山家集』の三十二首、『西行上人集』の十九首、『山家心中集』の十二首と比べると、『山家集』と『万代集』の重なるの多さは看過できない。

『万代集』所載西行和歌歌数一覧

万代集	所載歌数		その他・注
	山家集	別本	
* 49	六家集	上人集	その他・注
* 42	松屋本	追加	
* 43	別	心中集	
* 32	上人集	歌合集	
19	追	御裳濯	
* 8	心	宮河	
12	御裳濯	聞書	
3	宮河	残集	
	聞書	治承三十六	
* 1	残集	月詣集	
	治承三十六	後葉集	
	月詣集	玄玉集	
	後葉集	夫木抄	
6	玄玉集	勅撰集	
* 19	夫木抄		
*印は経盛歌一首を含む。別本二首重出 上人集一首重出。心中集は一首宮本本			

勿論、数の面のみでは不十分である。一首一首、西行家集の所収状況を検討する必要がある。その実態調査が、次に掲げる表である。

『万代集』所載西行歌が『山家集』と殆んど重なるということは、既に述べた。中で、『山家集』のみに載る歌

七	かしこまる	一〇九五	六六四	三八二	二八八
九一	あやにくに	六三八			
二	物思ふ	一二九八			
三	なとてわれ	六八九	六四四	三六〇	
一〇	*何故か	六五九	六三一		七三五
一一	日にそへて	六八三	六四二	三三九	九五
二	泪河	六九二	六四五		
三	もの思ふ	七〇九	六五三		
四	かゝる身に	六七七	六三七	三三四	一〇三二六右
一二	今よりは	一二七〇		六四六	
一三	うきをうし	松	四一五	七七七	七三六
二	とへかしな	二八五		三六二	
三	なほざりの	六七二		三七〇	
一四	山嵐に	一五六	一七九		
二	かはあひや	九七四			
三	風の音に	一〇三八			
四	あらし吹	一〇八二	七六三	四七七	
五	何となく	五三八	五二三		
一五	なかわれは	六四八	六二四		
二	うき身こそ	二九三	一九一		六右

経盛八

卷三四	玉葉	二七七	三松屋本ニハ載ラズ。
卷三六	統古今一〇七七	「治承」ハ平經盛詠トスル。	
玉葉	一六九二	山家集ハ松屋本ノミ。	
統古今一三八二			
統古今一三四六			
卷二〇	統拾遺	六九二	別本ハ重出。雲葉卷冬ニモ載ル
卷二一	新後撰	三八八	山家集トハ異文ガ大キイ。
卷三	玉葉	六九六	

『山家集』は六家集本系『山家集』あるいは松屋本と『西行上人集』を併せて整理したもの⁽²⁵⁾とされるむきもあり、それならそれは今述べたような集であることになるからである。『別本山家集』をそれと断定はできないにせよ、同じ型の集を想定することはできる。尤も、稿者には三者の關係は未だ判らないが。

『万代集』所載西行歌は『山家集』と多く合致するという事実、『山家集』のみに載る歌が十首も『万代集』に載るという事実、かような状況証拠から、『万代集』に載る西行の歌の殆んどは『山家集』に依ると判断してよいと思う。

念のため、『山家集』では拾えない『万代集』所載西行歌を見ておく。卷二―一歌は『御裳濯河歌合』に依ろう。卷三―五歌と卷十九―四歌は出所不明である。卷十五―二歌は、『西行上人集』『別本山家集』にも載るが、卷二―一歌同様、『御裳濯河歌合』に依ろう。卷十七―三歌は『西行上人集』『別本山家集』に載り、先程想定したような集が与ったかも知れない。因みに、『玉葉集』が『西行上人集』の「追加」以外に見えない卷十九―四歌を載せるという事実は、他に『拾遺風体抄』のような資料が存在したことを示すと言ってよい。

以上の検討から、『万代集』は、『山家集』から、もしくは、『山家集』、松屋本・『別本山家集』に連なる或る集を中心に『御裳濯河歌合』等の歌を併せて、西行歌を撰んだ、と見てよいことが判った。

但し、以上の検討は、詞書を含めて本文の吟味という操作を要しよう。

例えば『万代集』卷三―三の「題不知」歌、

みまぐさにはらのゝすゝきかりにきて鹿のふしどを見おきつる哉

は、『別本山家集』^(二六)に「夏草」の題で第三句「かりをきて」として載り、松屋本にも異文も無く載るが、『山家集』には載らない。但し、『山家集』には、「夏野草」という題で、

二二六 みまぐさにはらのをすゝきしがふとてふしどあせぬとしかおもふらん

という歌が載り、『西行上人集』^(二六)にも、「夏野月」⁽²⁶⁾の題でこの形で載る。つまり、『万代集』は松屋本や『別

本山家集』の方と合致するのである。このような、本文吟味からする西行家集と『万代集』の位置付けの検討が必要なのである。『西行全集』⁽²⁰⁾がこの二首を「似たれど」としつゝも別歌とするのは妥当だが^(二六六番)、本来は同一の歌と見てよからう。

実は、この二首の歌との関連において、

何となくくるゝしづくのおとまでもゆき哀なる深草の里

という『万代集』巻十四・五歌に付された『西行全集』⁽²⁰⁾の注が重大なのである。この歌は、『山家集』陽明文庫本

(五三)や『別本山家集』(五三番)等では『万代集』と同文だが、六家集版本は、下句を「山べは雪ぞ哀也ける」

(架蔵版本に依る。国歌)とする。『西行全集』⁽²⁰⁾のこの歌の脚注には、

この歌及(二六六)の歌等によりて、万代集に用ゐし西行の集は流布本と異りたる系統の本なることを知るべし。

とある。このように、西行家集それぞれの諸伝本と『万代集』との歌の本文の吟味が必要なのである。

詞書の差異の吟味も欠かせない。例えば、

鳥羽院かくれさせ給てのち人々歌よみ侍けるに

西行法師

おくりおきてかへりしのべの朝露を袖にうつすは涙なりけり

という『万代集』巻十八・一歌は、『新千載集』(二二)も、詞書に「給ひての後」という異文があるのみで、全

く同文で載る。ところが、六家集本系『山家集』の詞書は全く違っており、

院の二位のつばねみまかりけるあとに、十首歌人くよみけるに^(但、八一)

とある。『別本山家集』(七七)、『西行上人集』(四一)、『山家心中集』(三六)も、紀伊二位逝去の折の歌とす

る。この件について、『西行全集』⁽²⁰⁾は、脚注で、『万代集』の詞書を引用して、

何によりてかく誤りしにや^(八九一番)

と疑っている。この歌は、紀伊二位逝去時の十首定数哀傷歌が本来で、鳥羽院崩御時の詠とする『万代集』等は

誤りであらうが、とにかく、これは『万代集』所載の西行歌全ての詞書の本文の吟味の必要性を示す好例と言えるのである。

このように、『万代集』所載西行歌の本文の吟味は必要だが、それは稿を改めるとして、『万代集』もしくはそれに近い集から西行歌を撰んだ、ということとは明らかにできたと思う。こうなると、問題の歌が『万代集』で西行歌として収められたのも、『山家集』、それも六家集版本系ではなく陽明文庫本等の承譜の本もしくは松屋本に近い本に依って撰んだが為である、と判断して誤りはあるまい。

〈十一〉

『万代集』が問題の歌を西行歌とするのは『山家集』に依るということが、ほぼ明らかにできた。残るは、『山家集』と『別本山家集』との間における問題の歌の流れという点である。

問題の歌は、『別本山家集』では、六三一番として、六二八番から六五八番に至る「恋の歌よみけるに」の詞書でまとめられた歌群に載り、『山家集』では、六五九番として、六五三番から七一一番に至る「恋」の詞書の歌群に載る。両集のこの歌群が、歌順の点で密接な関係にあることは、久保田淳氏作製『別本山家集』『山家集』『西行上人集』²⁸⁾対照表で明らかだが、いまだ少し詳しく見てみることにする。

次に掲げる表が、『別本山家集』と『山家集』の問題の歌を収める歌群の歌番号を対照し、他集の所収状況を併せ示したものである。

一見して判るように、『別本山家集』の問題の歌群の歌は、末尾三首は別として、全て、『山家集』の問題の歌群に載る。しかも、歌に出入りはあるが、基本的に歌順が合致し、逆順になることはない。他の西行家集の場合、部分的には『山家集』と歌順が合致するが、『別本山家集』程には合致しない訳だから、この事実と対比すれば、

『別本山家集』『山家集』歌番号対照表

別本山家集	初句	山家集		西行上人集	心中集	歌合	万代集	夫木抄	勅撰集
		六家集本	松屋本	上人集	追加				
六二八	数ならぬ	六五三	載	三一七		七九御裳二四左			新古今 一一〇〇
六二九	うちむかふ	六五四	載						
	山かつの	六五五		三四一					
六三〇	常葉山	六五六	載	三五四				卷二九	
	なけくとも	六五七							
六三一	なにとなく	六五八	載	三七一	七三五		卷一〇一一		新古今 一一四七
	なにゆへか	六五九	載			八〇御裳二五左		卷三六	統古今 一〇七七
六三二	あやめつゝ	六六〇	載	三二七					
	なみたかは	六六一			七二一				新千載 一一九九
	しはしこそ	六六二	載						
	五八四物おもへは	六六三		三二九		八三			
	うきにたに	六六四							
	五八六中くゝに	六六五		三三三		八八宮河三四右			
	なにせんに	六六六							
六三三	むかはらは	六六七	載	三二六	一〇六			卷三六	玉葉 一四九二
	五九九身のうさの	六六八	載	三六八	八二		卷一九一三		
	五八一日をふれば	六六九	載	三一九	九七				

六五四	あはれく	七一〇	載	三五〇	一〇八	宮河三六右	
六五五	たのもしな	七一	載	五六二			
六五六	逢みては		載	三七三			
六五七	さりととも	一一四二	載	四七九			新古今 八八七
六五八	あふと見し	一三五〇	載	三四九	一〇七	宮河三六左	千載 八七四

注、初句は、『別本』所載歌は『別本』に依り、不載歌は『山家集』に依る。松屋本「載」は、『西行全集』の注に依る。

『山家集』『別本山家集』両集の関係の深さは知れよう——松屋本は『西行全集』の注記と高城功夫氏の翻刻を参考に、歌の載・不載を確認するに留めた。細部については改めて検討したい——。

『別本山家集』と『山家集』の両歌群の歌順が基本的には合致するという事実から、両者の関係は、前者に歌を加えて後者が成ったか、逆に、後者の歌を削って前者が成ったという、二つの場合が想定できる。無関係に編まれたものがかように合致する筈は無い。

想定できる二つの場合の一方、即ち、『別本山家集』に歌を加えて『山家集』が成った、という可能性があるか否かを、まず検討してみる。

『山家集』のこの歌群の五十九首中に、『別本山家集』のみに載り他には見えないという歌が十首ある。『別本山家集』『西行上人集』双方に載る歌は二十六首に及ぶ。『西行上人集』のみに載る歌が二首ある。つまり、五十九首中の三十八首（六割四分）までが、『別本山家集』か『西行上人集』か、或いはその双方に、載るといふ訳である。この二集を併せ、別なる歌を加えることで、『山家集』が成る、という可能性が考えられる——この歌群の歌に限っていうと、『山家心中集』所載歌は全て『西行上人集』に載り、『河合歌合』の歌は全て『西行上人集』にも『山家心中集』にも載る訳で、ここでは『山家心中集』と『河合歌合』はとりたてては触れない。尤も、この事実は

大きな問題に関わり、稿を改めて考えたい——。これに松屋本を加えると、五十九首中の五十首（八割五分）までが覆える訳で、別なる歌は九首のみとなる。

但し、問題が残る。それでは『別本山家集』のこの歌群の末尾三首、六五六・七・八番の説明がつかないのである。

『別本山家集』の六五六番は、『西行上人集』にも載る訳だが、肝腎の『山家集』にこの歌が載らないのである。『別本山家集』のこの歌群を中心に『西行上人集』の歌を併せて『山家集』が成ったのなら、かような筈はあるまい。

続く六五七番の場合、さらに問題が大きい。

六五七 さりともと猶あふ事をたのむかなしでの山ちをこえぬ別は

がその歌で、確かに恋歌としての解もできる。が、この歌は、『別本山家集』では、八三一番に、別離歌として、とをくしゆぎやうする比、菩提院のまへに、齋院にて人々別の歌つかふまつりけるに

の詞書で、末句「こえぬかぎりは」として載るのである。即ち、この歌は、『別本山家集』では、恋歌と別離歌として重出する訳である。それが、『西行上人集』においては、雑部の別離歌に、四七九番として、

とをく修行し侍けるに、菩提院の前に、齋宮にて、人々別の歌つかうまつりけるに

の詞書で、末句「こえぬ別は」の形で載るのである。詞書は『別本山家集』八三一番と『西行上人集』が合致し、歌は『別本山家集』六五七番と『西行上人集』が合致する、という訳である。これが、『山家集』においては、雑部に、

とをく修行する事ありけるに、菩提院のさきの齋宮にまいるた

りけるに、人々わかれの歌つかうまつりけるに

一一四二 さりともと猶あふことをたのむかなしでの山ちをこえぬわかれは

と、『西行上人集』と同じ形で載るのである。以上のような、詞書や末句の異文、恋と別離の扱いの差、などを見ると、『別本山家集』六五七番と『西行上人集』を併せて『山家集』が成ったとはとうてい考えられない。因みにこの歌は、『新古今集』にも、

とほき所に修行せんとして出でたち侍りけるに、人々わかれをし

みてよみ侍りける(但、八八
六番詞書)

八八七 さりともと猶あふ事を憑む哉しでの山ちをこえぬ別れは

と、『西行上人集』と同じ形で入集しているのである。⁽²⁹⁾

『別本山家集』のこの歌群の最末尾にあたる六五八番の歌は、

六五八 あふと見しその夜の夢はさめであれなながきねぶりはうかるべけれど

という恋歌で、『西行上人集』にも載る。これが、『山家集』では「恋百十首」(二四一―三五〇番)の一首であって、先程来問題の歌群の歌ではないのである。これも、『別本山家集』と『西行上人集』を併せて『山家集』が成ったという見方を採ることを躊躇させる。⁽³⁰⁾

『山家集』の「恋百十首」をめぐって、先覚ににぎやかな論争がある。その論点の一つは、この歌群が歌数の点では変則的な百十首である点であり、いま一つは、この百十首の後方に載る、

この歌、題も又、人に変りたることどもも、ありげなれども、書かず。

この歌ども、やまざとなる人の語るに随ひて書きたるなり。されば僻事どもや、昔今の事とり集めたれば、
時折節違ひたることども(日本古典文学
大系本に依る)

という左注の解釈である。これらをめぐって、百十首をまとめたのは西行か別人かという、本稿の課題とも関わる問題が論じられているのである。この件は後に触れるとして、この歌群の最末尾の歌がさような問題に関わるのだという点に注目しておきたい。

いま一つ注目すべき事柄がある。それは、先の対照表で『別本山家集』を殊更に二段に分けて示したが、その下段に示した歌番号の歌に関わる事柄である。

『山家集』六五五番の歌は、『別本山家集』では五九〇番で、問題の歌の載る「恋の歌よみけるに」という歌群の歌ではない。このように、『別本山家集』で下段に示した十首は、『別本山家集』では歌群を異にする。敢えて下段に掲げた所以である。

この十首を『山家集』の順に『別本山家集』の歌番号を辿ると、五九〇・六〇〇・五八四・五八六・五九九……と続き規則性がない。両集のこの十首の歌順は無関係と見てよい。ところが、この十首を『別本山家集』の歌順に戻し、それに対応する『西行上人集』の歌番号を見ると、密接な関係があることが判る。即ち、

〈別本山家集〉 五八一・五八四・五八六・五八八・五八九・五九〇・五九九・六〇〇・八三一・八七一
が『別本山家集』の歌番号であるが、これが、『西行上人集』では、

〈西行上人集〉 三一九・三二九・三三三・三三六・三三八・三四一・三六八・三七一・四七九・五三一

となるのである。一見して判るように、両集におけるこの十首の歌順は、逆行することがなく、基本的に同じなのである。この事實は、『別本山家集』の歌順が『西行上人集』と基本的に合致するところもある、ということを示す証である。

前述のとおり、問題の歌群では、『別本山家集』は『山家集』と歌順が合致する。その事実と、いま示した事実を併せると、『別本山家集』は『山家集』『西行上人集』の双方と何らかの形で交渉があったことになる。

この十首の内、末尾二首は、『別本山家集』でも『西行上人集』でも、問題の歌群より後方の歌である。そこで、最初の八首をまず検討すると、この八首は、『別本山家集』では、五八一番から六二八番に至る歌群(但し詞書を欠く)、つまり問題の歌群の直前の歌群に載るのである。

この事實を知ると、さきに可能性を想定しような、『山家集』の問題の歌群が『別本山家集』と『西行上人集』を併せたものなら、『別本山家集』の問題の歌群の歌の方は歌順を変えず、直前の歌群の歌の方は、『西行上人集』

と歌順が合致するにも拘らず、歌順を変えて、併せたということになる。これは、いささか不自然と言ふ外ない。残る二首の内、八三一番は、既に重出歌として吟味を済ませたので、残る一首を検討すると、

八七一 うきふしを先思ひしる涙かなさのみこそいとなぐさむれども

がそれで、「述懐の歌あまたよみけるに」の詞書でまとめられた八六六番から九二四番に至る歌群中に載る。『西行上人集』にも「述懐の心を」の詞書で載る（五三）。それが、『山家集』では、問題の恋歌の歌群中に、六七四番として載るのである。『山家集』が『別本山家集』と『西行上人集』を併せたものなら、両集で述懐歌とされるこの歌を恋歌として問題の歌群に収めるのは不審である。この歌は、歌のみを見ると恋としての解釈も可能ではあるが、述懐と明記された歌を恋に扱ひを変えるというのは、不自然と言わざるを得ない。

以上、問題の歌を収める歌群の把握と各歌の吟味から、『山家集』の問題の歌群は『別本山家集』に『西行上人集』等の歌を併せたものとする想定は、無理な想定であると判断してよからう。

想定できるいま一つ、『山家集』から歌を除いて『別本山家集』が成った、という可能性の有無が、次なる課題となってくる。

『山家集』と『別本山家集』の先後関係については、問題の歌群に限定せず、全巻についての本文吟味から、別に論証を加える所存であり、ここでは詳論しない。ただ、以上で『別本山家集』から『山家集』への流れは考えられないと証明できた訳だから、残るは、『山家集』から『別本山家集』へ、または、両集は祖本を共有する兄弟関係にある、のいずれかとなる。

そのいずれであっても、『山家集』が『別本山家集』よりも前に位置すると言える。既に、本稿第七節で、『別本山家集』の存疑歌をめぐる後出性を例示したとおりであり、ここでは、『別本山家集』の問題の歌群の二首を例に、それを確認するにとどめたい。

六五四 あはれ／＼この世はうしなさもあらばあれこむ世にかくやくるしかるべき

は、前掲の表で判るように、西行自撰が間違いない『宮河歌合』や、『山家集』・松屋本・『西行上人集』・『山家心中集』に載るが、第二句の「うしな」は全て「よしや」とある。本文の流れは『山家集』が『別本山家集』に先行すると言える。

六五八 あふと見しその夜の夢は、さめであれながきねぶりはうかるべけれど

も、『宮河歌合』をはじめ、『山家集』・松屋本・『山家心中集』・『西行上人集』・『千載集』に載るが、第二句は全て「その夜の夢の」である。これも、『山家集』の方が『別本山家集』に先行する本文を有することを示す例である。

問題の歌群に限っても、他にも『山家集』と『別本山家集』の異文は多いが、『宮河歌合』という、西行自撰が確かな集が本文上の物差となる二例を示してみた。『宮河歌合』と『山家集』の本文が合致するのであるから、これと異なる『別本山家集』の本文は『山家集』より後出と言ってよいのである。

『別本山家集』は『山家集』より後出の本文である。たとえ両者が祖本を共有する兄弟関係にあったとしても、『山家集』が兄である。従って、問題の「何故か」の歌の流れも、そう扱えておいてよからう。

へ十二く

数節にわたり、「何故か」の歌をめぐる西行家集と私撰集・勅撰集の先後関係を検討した。その結果、『山家集』から『別本山家集』へ、また、別に『山家集』『万代集』『続古今集』『西行上人集』の「追加」の順で、誤りが継承されたということが明らかにできた。

推測できたこの先後関係は、問題の歌の初句の異文の推移とも矛盾しない。即ち、『治承三十六人歌合』は初句

が「何せんに」だが、『山家集』は「何故か」で、『別本山家集』も「何故か」である。『万代集』も「何故か」であるが、『続古今集』には「何故に」とあり、『西行上人集』の「追加」も「何故に」である。つまり、初句の三種の異文は、『治承三十六人歌合』の「何せんに」から『山家集』の「何故か」、そして『続古今集』の「何故に」と、順に変化した訳で、夫々無関係に生じたものではないと見てよいのである。

初句の異文の推移で注目されるのが、「何せんに」から「何故か」へ、つまり『治承三十六人歌合』の型から『山家集』の型への変化である。この本文変化の質の点から見ると、現存『山家集』は、「何せんに」を初句とする文献——例えば『治承三十六人歌合』ごときのもの——を資料としたのではなく、既に初句が「何故か」となっていた文献——それが、現存『山家集』祖本か、現在知られない別種の西行家集か、歌稿のような他の資料か、判らないが——を資料としたと見てよからう。

尤も、これには、『治承三十六人歌合』諸本の本文調査と、本稿で問題の諸集の本文調査、その双方を併せた吟味、という手続きが必要になる。が、その件を詳述する紙幅が無く、改めて報告するが、調査の概略を述べておく。

この書の管見の四伝本（三手文庫本・山口県立図書館本・神宮文庫本・松平文庫本）には、大きな本文の差は無い——「何せんに」にも異文はない——。中で、神宮文庫本の本文が全体として本来的な性格を多く含んでいる。他の諸集所載歌との本文の比較からも、それが確認できる。尤も、この本は十二番右以降のみの零本で、全巻は覆えない。が、この本の存在がこの書の本文の素性の良さを保証しているとは言える。

『治承三十六人歌合』の問題の歌は、この書の本文調査から、初句「何せんに」に間違いはない。従って、『山家集』が「何故に」の形で、しかも西行歌としてこの歌を載せるのは、『治承三十六人歌合』以外の介在の文献があったと考えざるを得ない。

この件と関わるのだが、問題の歌が問題の歌群のあの位置に載るのは、偶然もしくは物理的事情による混入ではなく、多くの西行歌を資料として、吟味しつつ配列に工夫をこらした上でのことと見てよいのである。問題の

歌群の冒頭は、

恋

六五三 数ならぬ心の咎になし果てし知らせてこそは身をもうらみめ
 六五四 うちむかふそのあらましの面影を真になして見るよしもがな
 六五五 やまがつの荒野をしめて住みそむる片だよりなる恋もする哉
 六五六 常盤山しひの下柴刈りすてんかくれておもふかひのなきかと
 六五七 なげくとも知らばや人のおのづから哀と思ふこともあるべき
 六五八 何となくさすがにをしき命かなありへば人やおもひしるとて
 六五九 なにゆゑか今日まで物を思はまし命にかへて逢ふ世なりせば
 六六〇 怪めつゝ人知るとてもいかゞせん忍びはつべき袂ならねば

(校訂の施されている日
本古典文学大系に依る)

である。これは、七十一番まで続く歌群だが、ここでは、問題の六五九番の直後で引用を止めておくことにする。一見して判るように、この辺りは、忍恋・初恋・思恋といった、恋の進行のこく初期の歌が集中している。問題の六五九番も、「命にかへて」逢う瀬を願うという歌である。実は、この歌群の末尾近くでも、

六九九 もの思へばまだ夕暮のまゝなるに明けぬと告ぐるしは鳥の声

七〇八 いかにもせん来む世の鐘となる程も見るめ難くて過ぐるうらみを

七一一 頼もしな宵あかつきの鐘のおと物思ふ罪も尽きざらめやは

といった具合で、「物思へば」「見るめ難くて」「物思ふ罪」という、まだ逢恋には至っていない歌である。つまり、この歌群は、恋の進行のこく初期、恋の成就までの歌を集めたものである訳である。問題の歌もその進行の中にある。

いま少し詳しく見てみる。冒頭の六五三番は、「知らせてこそは身をもうらみめ」と自分だけの思いの段階である。続く六五四番も、「面影を真になして見る」方法がほしいという訳で、前歌と同じである。それが、六五五番

になると、少し進み、「片だよりなる恋」となる。六五六番は、「かくれておもふかひ」がないかと、心中を表情に出すことを考える段階になり、続く六五七番は、そうすれば相手が「哀と思ふこともあるべき」と、前歌の意をさらに進める。

六五八番は、「ありへば人やおもひしるとて」と前二首の延長線上の歌だが、「何となくさすがにをしき命かな」と「ありへば」とが、続く六五九番、即ち問題の歌の「命にかへて逢ふ世なりせば」へと連続していくように配されているのである。続く六六〇番は、その「命にかへて逢ふ世」を願うこととの関連で、「忍びはつべき袂ならねば」と承けていると見てよい。「忍びはつ」は「涙を」の意だが、「はつ」の語から、最後まで、つまり命が尽きるまで忍び通すことはできない、の意もくみとってよく、直前の「をしき命」「命にかへて」との連続を見ることができる。

以上のように、この歌群は、各歌の主題や表現・用語の点にまで、進行の原理に基づき、歌の配列に心が配られているのである。そして、問題の歌の位置は、不自然ではない。これは、この歌が偶然あるいは物理的な事情でこの位置に混入したのではなく、既にこの歌を西行歌とする資料に依って、他の西行歌と併せて、配列の工夫がこらされたことを示していると見てよい。

いま一つ、問題の歌とこの歌群の歌との密接な関連を指摘したい。それは、問題の歌の「物を思はまし」という表現である。久保田淳氏が、

「物(を)思ふ」といふことばは、かれ(西行のことと、稿者注)によって頻用されたことばであった。

「物を思ふ」といふことばが執拗についてまはる歌集は、おそらく『山家集』の他にないであらう。(34)

と言われたこととも関わるのだが、前引の十数首のみでも見当がつくように、この歌群には「物思ふ」「思ひ」という語が多い。この歌群の五十九首の内に、「物を思ふ」の型の表現を含む歌が他に十首もある。それに、「思ふ」「思ひ」という語が詠まれた歌が十八首ある。(35)中には、「哀と思ふ」(六五)・「人の咎にはおもはぬ」(六八)のように、恋の「思ひ」だけの意ではない例が七首あるが、それにしても、問題の歌を含めて、五十九首中の二十三首

(三割九分)、博く数えると二十九首(四割九分)の歌が「思ふ」と詠んでいる。「物を思ふ」の型の歌が一割七分もこの歌群を占める、という事実は、問題の歌との関連で、注目されてよからう。問題の歌の「何故か今日まで物を思はまし」は、反実仮想とはいえ、この型の表現を採り、結果的に、この歌群の中で何の違和感もなく、確かな位置を占めているのである。

問題の歌の初句の異文の流れと、この歌を収める歌群全体の表現および配列の面とから、問題の歌は、既に西行歌とされている資料に依って、『山家集』編集時に、そのまま採り入れられてしまった、と考えて誤りはなからう。

へ十三

煩雑にわたった本稿の整理をしておきたい。

『山家集』『別本山家集』に西行歌として載る「何故か」の歌は、『治承三十六人歌合』にあるように、平経盛の詠である。従って、同集は別人詠を誤って収め、『西行上人集』李花亭文庫本は西行歌と誤って追加した訳である。『万代集』や『続古今集』は西行歌と誤られた資料からこの歌を採んだということになる。

この歌を西行詠と誤ったのは、現存資料では、『山家集』が最初で——尤も、『山家集』の資料の段階で既に誤っていたと見てよいのだが——、これを『別本山家集』が継承し、別に、『万代集』『続古今集』『西行上人集』の「追加」が順に継承した。

以上が、本稿で論証した事柄であるが、ここに、大きな問題が出て来る。『山家集』は西行自撰か他撰かという、これまでも論争のあった件がそれである。自撰ならば他人の詠歌を自分の歌として自分の家集に収める筈は

あるまい、という経験則からの推理が与るのは言うまでもない。因みに、『治承三十六人歌合』が問題の歌を経盛詠とするのが誤りなら、この書は西行・経盛兩人の在世中の成立であるから、兩人が承知すまい、という推則も可能である。家集には他人詠が混入することがあるが、それはさほど珍しいことではない、という見方もある。ただし、それは、他撰家集の場合に限っておいでもよからう。

『山家集』は自撰か他撰か。勿論、これは、本稿のごとく唯一一首の歌の吟味では決着はつかない。先覚に多方方面からの御研究があることは、周知のところである。特に、現存『山家集』は原型に増補されたものとする見方が現今学界では有力であり、これが自撰・他撰の件と関わっている。

窪田章一郎氏は、大著『西行の研究』⁽³⁷⁾において、

『山家集』は自撰であるか、他撰であるかということは、明白には知られない。

と言われ、『山家集』中の前掲の左注などに注目されて、

これらによって理解されるのは、『山家集』を編纂しようとした時、西行の独力でされたものではないらしい点である。身边にいる親しい門下ともいえるべき人物が、ある程度の作品は、散佚しているのを捜し求めて、協力したのであろう。西行もまた細心に作品を手もとに集めておくという人ではなく、そのような人物に指示を与えて、蒐集させるといふことをしたのであろう。その結果、一応まとめられた『山家集』には、末尾に追加・増補すべき作品が、後になって発見されているのである。

とされた。『山家集』は西行自撰だが、最初から他人も参与した、というのである。

最近では、同じく増補を認める考え方ではあるが、

『山家集』の成立事情は必ずしも分明でないが、春・夏・秋・冬・雑・百首歌に部類された原形が、数次に亘って増補されたと考えられる。⁽³⁸⁾

という犬養廉氏の御発言のような、後の増補をも認めた『山家集』の成立論になっている。それを最も推進されたのが、松野陽一氏の御見解である。氏は、『山家集』の構成を、A(四季・恋・雑)・B(恋百十首)・C(旅歌・

讃岐)・D(旅歌)・E(十題百首)という歌群としてとらえられ、

山家集は原型(A)部分が自撰されて、後成の私撰集資料に供された上に、B・Cと自撰増補歌群が加わり、この段階で山家心中集が抄出された。そしてさらにD・Eが西行自身か第三者の手で付加されて現行の流布本系山家集となった。

とされるのである。基本的には『山家集』は西行自撰と自撰増補であり、順次増補があつて、後の増補に別人の参与の可能性もある、という見方で、これは、ごく最近における、後藤重郎氏の、

下帖においては、度々の生長段階が見られると共に、自撰・他撰の問題もこれに絡まり、現段階においては、西行自撰の「原山家集」ともいふべきものがあり、その後、西行自身により、または他の人の手により、次々増補されて現在の『山家集』の形態をなすに至ったと考えられている。という、研究史の整理を併せた御説に継承されている。

諸先覚の『山家集』増補本説は、稿者なりの追跡でも述べられるところが多く、大筋の点で、賛意を表するものである。ただ、本稿の論証を通じて明らかにしたように、『山家集』の増補は、必ずしも歌群単位で行なわれたとは限らず、各々の歌単位の増補という点も考慮すべき段階に至っている、とは言えそうである。本稿で検討したのは、唯の一首のみだが。

特に、本稿で検討した問題の歌が、諸氏が「原型」とされる『山家集』の恋部の歌であるという事実を見ると――第七節で登蓮詠の可能性ありとした歌も「原型」とされる秋部の歌である――、詠者存疑歌は必ずしも増補された歌群とされている歌群の歌ではなく、むしろ、「原型」とされる歌群中に在る訳で、注意を要しよう。全ての歌群に、西行家集として、『山家集』として、本来的ではない歌の混入があるとも考えられるのだから。

勿論、そのような歌単位の混入が、歌群単位の増補の前か後か、ということを検討する必要がある。稿者には、まだその検討の準備が無く、現在のところ判らない。が、現存『山家集』は、「原型」とされている歌群であつても、増補もしくは誤入の歌がある、とだけは言えそうなのである。

『山家集』他撰という件と関わって、では編者は誰かという問題が生じる。これについては、山岸徳平氏の藤原隆信編者説がある。書陵部藏幽斎本の奥書を外部徴証とし、『山家集』の詞書に見える西行と大原三寂や隆信との親交を内部徴証とする考証である。山岸氏説に関する稿者の吟味は準備が未だ無く、また、稿者なりの考えがある訳でもない。改めて検討してみたいと考えているが、氏が「流布本の山家集は、西行の自撰ではない」とされた点は、注目したい。

要するに、稿者は、現在私どもが見る『山家集』は、別人詠をも西行歌として収めるというふうな誤謬をも含んだ、他撰家集と考えるのである。

勿論、別人詠歌の誤入があるという事実は、『山家集』他撰を証明する為の証拠の一つでしかない。別の証拠、例えば、『山家集抄』の「六歌仙の集中に、唯、此山家集のみ、後人の撰み集めしと見ゆ」といった外部徴証——尤も、意見証拠だが——の吟味や、山木幸一氏が言及されたような、詞書の語法、特に「き」「けり」の用法といった内部徴証からの吟味、等を要しよう。が、別人詠歌の誤入という証拠は、現存『山家集』を他撰と証明する為の、かなり、というより極めて、価値の高い証拠とは言えそうである。

いま一つ、『山家集』西行他撰の件と関わってくるのが、西行家集全ての成立の先後関係の問題である。これも、本稿の課題ではなく、改めて検討する所存であるが、本稿の論証との関連で、稿者は次のような見当を付けているということだけを申し述べる。即ち、問題の歌を——そして登蓮詠と思しき「清見鴻」の歌を——、『山家集』と『別本山家集』が誤るとするのは、西行家集としては本来の姿を離れることになり、この歌を載せない『西行上人集』『山家心中集』『聞書集』『残集』は、この誤りが無いという一点に限っては、西行家集本来の姿を保っているのを見てよい、ということである。勿論、これらの集も、一首一首について、西行詠か否かの吟味を要するのだが。

『山家集』の現存形態は西行日撰に非ず、これが本稿の立証課題である。これを証明する為に、『山家集』には別人詠歌の誤入があるということを、『治承三十六人歌合』所載平経盛詠歌を例に、吟味してみた。自撰家集であるなら他人詠歌を自分の歌として自分の家集に収める筈がない、という経験則からの推理を以って、先の立証課題を論証したのである。

本稿で試みた、立証課題、その立証の為に提出した証拠、そうして、証拠価値の判定、また、推理の過程と方法などに関して、大方の御叱正・御教示を賜われれば幸いである。

注

- (1) 「文芸言語研究」文芸篇六（昭和五十六年12月）。
- (2) 久松潜一氏編校「中世の文学 歌論集」一（昭和四十六年2月刊）所収、有吉保氏校注担当。底本は、群書類従本。
- (3) 風巻景次郎氏校注担当「山家集金槐和歌集」（昭和三十六年4月刊）。
- (4) 谷山茂氏「未刊中世歌合集上」『古典文庫』昭和四十四年3月刊。所収「治承三十六人歌合」の「解題」。
- (5) 尾山篤二郎氏校注「西行法師全歌集」（昭和十三年7月刊、佐佐木信綱氏等編「西行全集」（昭和十六年2月刊）など。
- (6) 岸上慎二氏「後撰和歌集の研究と資料」（昭和四十四年1月刊）第八章・第十章など。
- (7) 「拾遺集」卷三（八二〇番）の「題しらず よみ人しらず こぬ人をまつちの山の時鳥おなじ心にねこそなかるれ」（国歌大観）を本歌とする。
- (8) 「平安朝歌合大成」二五（底本は、十卷本と廿卷本。左一首目）。
- (9) 「私家集大成」所収の、宮内庁書陵部蔵本・西本願寺本「三十六人集」本・部類名字集切の三本を調整。
- (10) 「西行上人集」の「追加」の詞書の欠脱は、これ以外にも多い。
- (11) 日本古典全書「山家集」（昭和二十二年12月刊）。
- (12) 「西行法師全歌集」（昭和二十三年7月刊）二〇六頁脚注。
- (13) 管見の「山家集」諸本では、六家集版本（梁蔵本）が一五六九首、筑波大学図書館蔵本（桑原博史氏著「西行全歌集上」所収）では一五七二首、といった具合で、大巾に修正を要する程の誤差は生じない。
- (14) 管見の「西行上人集」諸本では、天文本（『新撰社善本叢書』所収）は一五八五首、細川本（『在九州国文資料影印叢書』）は一五九七首、東大国文研究室蔵本（『巻首落丁あり』）は一五八〇首、延宝二年版本は一五九二首で、修正を要する程の誤差は生じない。
- (15) 「西行物語」は、桑原博史氏著「西行物語全訳注」（講談社学術文庫、昭和五十六年4月刊）に依り、「静嘉堂文庫蔵伝阿仏尼筆本」（昭和五十四年11月刊）を参照して調査。

- (16) 岡田希雄氏「夫木和歌抄私見」(『国語国文の研究』昭和三年10月)、浜口博幸氏「夫木和歌抄成立攷」(『国語国文』昭和二年12月)、山田清市氏「作者分類夫木和歌抄 研究索引篇」(昭和四五年3月刊)等に依る。
- (17) 丹鶴巖書本に依る。猶、本稿「上」に引いたこの奥書について、佐藤恒雄氏より、撰者自筆本は「暮秋致派創者也」である旨、御注意を賜わった。記して御礼申し上げる。
- (18) 桑原博史氏著「西行物語全訳注」(注15)の「解説」。
- (19) 詳述する紙幅が無いが、本文の上でも、そのことは推測できる。
- (20) 佐佐木信綱・川田順・伊藤嘉夫・久曾神昇氏編「西行全集」(昭和十六年2月刊)。
- (21) 注20の書に示された松屋本に関する注記と、高城功夫氏「松屋本『山家集』」(『校異・研究』)、「東洋」昭和五十七年連載中に依り調査、稿後、久保田淳氏編「西行全集」(昭和五十七年5月刊)を参照した。
- (22) 「私家集大成」所収「源節光集」の「解題」において、桑原博史氏は、「末尾の六首は、勅撰集による増補である」とされる。
- (23) 森本元子氏「私家集の研究」(昭和四一年11月刊)・松野陽一氏「寿永百首について」(『和歌文学研究』三十一号・昭和四九年6月)に依る。
- (24) 「万代和歌集」(伝本考)「文学・語学」八六号・昭和五四年12月)における安田徳子氏の御発言など。
- (25) 山岸徳平氏は「別本山家集」も亦、西行自筆のもの、もしくは西行自撰の集であったかと考へざるを得ない(『山家心中集に就いて』)。「山岸徳平著作集Ⅱ」昭和四六年11月刊)とされるが、久保田淳氏は「西行上人集」や「山家集」系統の本、さらには松屋本のごとき本文を有する本から作品を抜いて再編集した本ではないかと考える(『平安私家集』所収の「解説」、昭和五四年7月)とされる。
- (26) この歌は「西行上人集」諸本で異同が大きい。詞書も、「夏野月」とする東大国文研究室本、「夏野草」とする天文本・細川本・内閣文庫(二〇一・五一五)本、「夏野鹿」とする延宝版本・内閣文庫(二〇一・五一四)本、などがある。
- (27) 但し、「国歌大観」に依る。この集の諸本の本文については、未調査。
- (28) 日本古典文学影印叢刊「平安私家集」所収「別本山家集」の「解説」に付されたもの。
- (29) 日本古典文学大系「新古今和歌集」(底本、小宮堅次郎氏蔵本)に依る。
- (30) 伊藤嘉夫氏「歌人西行」(昭和三年7月刊)、窪田章一郎氏「西行の研究」(昭和三六年1月刊)、久保田淳氏「西行の恋歌について」(『国語と国文学』昭和三十七年11月号)、山本幸一氏「山家集題号考」(『国語国文研究』第四四号・昭和四四年9月)など。
- (31) 一見、五七九番の「寄月恋」の詞書が六二七番まで続くごとくだが、この詞書は五七九・五八〇番のみに関わり、五八一番「目をふれば袂の雨のあしそへてはるべくもなき我こころかな」以下は、この詞書の歌ではない。とりあえず、五八一番の詞書が欠けた、と見ておくが、五七九番の「恋の歌をみけるに」の詞書が六二七番までの歌群の詞書で、五七九・五八〇番の二首が「寄月恋」の詞書と共にこの歌群の中にまぎれ込んだ、という可能性が強い。「平安私家集」四三五頁以下参照。
- (32) 「治承三十六人歌合」本文考」と題して、筑波大学日本文学会例会(昭和五十六年十一月十四日)に、口頭で報告した。

- (33) 歌を時間の推移に従って配列することを「進行」に依る配列と称する。恋でいうと、『堀河百首』の「初恋」から「初偶恋」、そして「恨」へという配列にその典型が見られる。
- (34) 「西行の恋歌について」(『国語と国文学』昭和三十七年11月号)。後に、『新古今歌人の研究』(昭和四八年)の第一篇第三章第三節に収められる。
- (35) 歌番号のみを示す。六六三・六六七・六七一・六七六・六九九・七〇五・七〇六・七〇七・七〇九・七一。
- (36) 歌番号のみを示す。六五六・六五七・六五八・六六四・六六五・六六六・六六八・六七四・六七五・六八〇・六八三・六八四・六八五・六八七・六八八・六九一・六九六・七〇三。
- (37) 昭和三十六年1月刊。第一篇第一章の「4 山家集の成立、および価値」。
- (38) 『鑑賞日本の古典 9』(昭和五五年10月刊)の「山家集」の「解説」。
- (39) 『鑑賞日本古典文学 17』(昭和五二年3月刊)の「山家集」の「総説」。
- (40) 新潮日本古典集成「山家集」(昭和五七年4月刊)の「解説」。
- (41) 「山家心中集解題」(『日本名筆全集』昭和四六年8月刊)。「山岸徳平著作集 Ⅱ」(昭和四六年11月刊)に、「山家心中集に就いて」として収録。
- (42) 「山家集題号考」(『国語国文研究』第四四号、昭和四四年9月)。
- 〈付言〉 本稿は、稿者担当の昭和五十四年度講義「日本文学講読Ⅶ」の成果の一部である。また、本稿の骨子は、筑波大学日本文学会例会(昭和五十五年五月三十一日)に於いて、口頭で報告した。演習に参加した学生諸君、例会の参会者諸氏より、多くの示唆を得た。また、本稿「上」に関して、多くの方々から種々有益な御教示や御助言を賜わった。中で、畏友杉浦清志君より、問題の歌の稿者の解釈の不備を、適切な用例を多く示しつつ指摘された。以上、ここに記して、あつく御礼申し上げる。
- 猶、本稿脱稿後に刊行された久保田淳氏編『西行全集』(昭和五十七年五月刊)によって、本稿の引用や伝本名を改めるべきところがあり、松屋本の全貌も判明し、本稿の改稿を考えたが、既に報告してある「上」との関連もあり、改稿せずにおく。本稿の調査の確認など、この全集を活用させて頂いた学恩を御礼申し上げる。